コロナ禍で学校教育をどうすすめるか

高教組教文部長
古畑　邦明

「上からの指示待ち」による対応の遅れ。「再開」後のスケジュールについて決めたことが、教育委員会の指示でひっくり返えされた学校も。

ようやく夏休みに入ったと思ったら、もう夏休みが終わる。4～5月のコロナ臨時休校で失った授業時数を確保するために、ほとんどの学校は長期休業を短縮した。中には7月いっぱい授業を行い、盆明けすぐに2学期が始まる学校もあった。今、全国で感染拡大が再燃し始めた。もしも高知に飛び火したら2学期のスタートを切れるのか、再び臨時休校を余儀なくされたとき、授業や進路保障をどうすればよいのか、生徒も教職員も不安が広がっている。コロナ禍で学校教育をどうすすめるか、これまでに明らかとなった課題を整理し、2学期に臨まなければならない。

コロナ禍の学校で起こった問題のひとつが、「上からの指示待ち」による対応の遅れだ。急な臨時休校を強いられ、生徒や保護者に「再開」後の予定を示さなければならない場面で、「早く指示を出してください！」と管理職を仰ぎ、管理職もその判断を教育委員会に委ねてしまうことで生じる間だ。経験したことのない事態、ましてや人の命に関わる。現場では責任を背負いきれないため、やむを得ない部分もある。しかし、対応が遅れることで生じる混乱もある。生徒の近くにいるからこそ、より安心・安全な対応を速やかに行うことも可能だ。「指示待ち」の間にも状況は変化することを考えれば、現場の判断はもっと尊重されるべきだ。

教育委員会との関係で気になったのが、いくつかの学校で「再開」後のスケジュールについて運営委員会や職員会で話し合って決めたことが、教育委員会の指示でひっくり返えされたことだ。

「再開」後の1週間は学年別に短時間の登校とし、緩やかに日常へ戻そうと決めたのに、教育委員会は「事前に示したガイドラインに沿っていない」からとこれを撤回させ、初日から午前中の通常の時間割を入れることになった。生徒の実態に合わせて考えた対応を一方的に変更を迫るのはいかがなものか。「だったら全部決めて下さい！」と、指示待ちになるのも無理はない。こうした教育委員会の対応は、現場の主体的に判断する力をそぐ。

一方、現場段階で速やかに対応した学校もある。高教組執行部が行なった各職場分会員へのコロナ対応の聞き取りによると、県教委のガイドラインに必ずしも沿わないケースもあった。そうした学校では、生徒や保護者にアンケートを取って対応を考え、管理職がリーダーシップを発揮して実行に移していた。他にも、教職員からの意見を積極的に取り入れながら、主体的な対応をとった学校もある。

行政側は今後の対応として、全国や県下一斉の臨時休校といった措置は基本的に取らないとしている。したがって、学校や教育委員会が状況に応じた判断を迫られる。感染状況が刻々と変化する中で、生徒たちに何が必要かを意見できるのは私たち教職員だけだ。形骸化したといわれる職員会の機能を取り戻しながら、速やかな合意形成が必要になるだろう。2学期はそれぞれの「チーム学校」としての力量が試されそうだ。

最後に、「未来をひらく教育のつどい～教育研究集会～」を10月31日（土）10～17時、高知工業高校で開催する。テーマはこの文章のタイトルと同じだ。午前の全体会では、高知県の感染対策の責任者である吉川清志さん（小児科医）にお越しいただく。午後の分科会も含めて高退協の先輩方にもぜひご参加いただき、アドバイスをいただければ幸いだ。

高教組

未来をひらく教育のつどい～教育研究集会～

10月31日（土）10～17時、

高知工業高校

「長嶋茂雄」で妻に叱られたこと

土居修

長嶋茂雄―60年代に少年時代を過ごした私のヒーローである。

野球の常識を突き抜けて躍動する背番号3は眩しいほどの輝きを放っていた。彼の一挙手一投足が幼心に鮮烈な印象として映った。還暦をいくつか過ぎておなお、「4番サード長嶋」と雄叫びを上げながら、稲を刈り終えた田んぼで三角ベースに興じた日々を懐かしく思い起こすことができる。

極端なアウトステップを真似た。だが、最後の最後までバットのヘッドを残すことができなかった。自身の非才を嘆きながらもそれを規範し続けた日々。悪辣だと仲間から嘲笑されても「長嶋茂雄になるための試練なんだよ」と噛いていた。

空振りをしてヘルメットを三塁側に飛ばすことにも臆病ではなかった。小さめの野球帽を被って打席に向かう私に容赦のない罵声が浴びせられたが、躊躇しなかった。それも長嶋茂雄になるための必要条件であると信じて疑わなかったからである。

オールスター戦9連続三振奪取の記録をもつ伝説の名投手江夏豊は「打席ごとに何故打たれたのか、何故打ち取れたのかが全く分からない」と語っている。また、球界を代表する捕手である野村克也は「計算できないバッター」と評している。空前絶後の才能であった。奇跡といってよい。守備においても他の三塁手よりも1.5メートルほど後方に守り、遊撃手や投手の守備範囲の打球を横取りする。スローイングの後にヒラヒラさせる右手に恍惚となった記憶も忘れがたい。

後年「男の美学」ということばを知るに至って、折にふれて少年時代を思い出すときがある。長嶋茂雄にはなれなかったが、長嶋茂雄を追いかけた自身の生きざまをこよなく愛おしいと思わずにはいられない。

長嶋茂雄には逸話も少なくない。好きな四字熟語を書いてと渡された色紙に「長嶋茂雄」と書いたという。天真爛漫という言葉を知らなかったのだと私は思っているが、臆面もなく「長嶋茂雄」と書く行為こそが天真爛漫といってよいだろう。大学時代には「『I live in Tokyo』」を過去形にしろ」という問題で「I live in EDO」と答えたという。石原裕次郎とアメリカへ行ったときには「外車ばかりだねえ。さすがアメリカだ」と感心し、マクドナルドを見て「アメリカにも進出しているんだ」と叫んでいる。

さて、「妻に叱られて」と題した駄文も今回で8回目を数える。時おり「奥さんは知っちゅうが」と問われるが、「いや、見せてない」と応じている。またも叱られればこのシリーズを終了できなくなるという思い。

ともかく、過去7回の妻は私を叱りながらも、そこはかとなく愛情を漂わせていたように思う。しかしながら、今回の妻は全く別の人格になったといってよい。「叱る」という行為に私の未来を祈る視点は微塵もなかった。仁王立ちして、憤怒に全身を震わせていたのである。

今から30年の時間を遡る。椿原高校での勤務も3年目となっていた。ある仲秋の夜、修学旅行団を出迎えようと、3歳になった長女を連れて出かけた。帰着地は高陵交通の駐車場。私の居住する大蔵谷の官舎からは車で3分ほどの場所である。いつもならこの時刻には閑散としているが、その夜は異様な熱気に包まれていた。信じがたい光景に私は陶然となってしまった。帰宅した私を見て、妻が「ミーちゃんは？」と聞いた。

「えっ！」

「ミーちゃんはどこよ」

そのとき、はじめて正気に返った。

「なにしているのよ。バカな男もいるもんだわ、ねえ」

長女を置き去りにするという失態を演じたのはなにか判然としないものの力に支配されたのだと振り返る。友人のトラブルに巻き込まれ、アラブ人を射殺した主人公ムルソーが殺人の動機を「太陽が眩しかったから」と語っているように。（アルベール・カミュ『異邦人』）

妻の仮借のない問責を浴びて玄関のドアを開けたとき、同僚の女性教師がふたり、長女を挟んで立っていた。薄ら灯りに長女の黒目勝ちの目が浮かび上がった。

私は長女を抱き上げ、そして、ごめんねとやさしく呟いた。

この一件があって、しばらくは完全に無視され、弁当さえも作ってもらえなかった忌まわしい記憶。だが、私の魅力のひとつである「男の哀愁」はこの夜に獲得したのだと信じている。美しい誤算であったと思う。今でも快哉を叫ぶ夜がないことはない。

私のヒーローであった長嶋茂雄は自分のプレーを見せようと後楽園球場のスタンドに息子を連れていき、自分は試合に没頭した。そして試合が終わったとき、ひとりで家に帰っている。

妻は尋ねた。「一茂は？」

「あっ！」

一説によると、「どこかで遊んでるんじゃないの？」と答えたというが、球場からの電話で初めて息子を置き去りにしたことを思い出している。

長嶋茂雄に憧れながら、長嶋茂雄になることは遂にできなかった。だが、遅れながらも同じ失態を犯したことで、「長嶋茂雄的」になれたことを誇りに思っている。あの夜から徒に馬齢を重ねてきたが、過ぎ去った少年の日々を今も愛惜してやむことはない。